中学校

学年を越えたチームで効果的な支援を考えよう

|  |  |
| --- | --- |
| １．目　的 | 　特別な支援を要する生徒に係る１学期のアセスメントを基に、対象生徒に関わる学年を越えた教職員がチームとなって、２学期の支援策について検討、共有する。※対象生徒への支援について、ＰＤＣＡサイクルを、短期（普段）－中期（学期毎）－長期（１年）とつなげることを意識しましょう。※外部講師による講義や助言を組み込むと、さらに効果的です。例えば、県総合学校教育センターの校内研修等講師派遣事業を活用することができます。 |
| ２．対　象 | 教職員　（※夏季休業中の実施を想定した研修モデルです。） |
| ３．時　間 | ９０分（事前５分、講義２０分、演習・協議４０分、共有１０分、助言１０分、省察・振り返り５分）　※校内外の講師による講義及び助言を省略して、６０分で実施することも可能です。 |
| ４．形　態 | 　全体（校内外の講師による講義）→グループ（対象生徒への支援についてＫＰＴ法を使って検討、協議、発表）→全体（助言）→個人（振り返り）※グループの分け方学級担任を含め、対象生徒に関わる学年を越えた教科担任や部活動関係教員等の４人程度のグループを学校の実態に応じて編成 |
| ５．準備物 | □対象生徒の実態や指導・支援に関する資料（１学期に行った支援やその結果等）□支援ヒント集□協議用ホワイトボード（各グループに１枚）□ホワイトボードマーカー□付箋（青・ピンク・黄色をそれぞれ10枚×人数分）□黒サインペン（人数分）□ＫＰＴシートまたは模造紙（グループ数分）　※ＫＰＴシートはダウンロードできます。□ＫＰＴシートを貼るためのマグネット（グループ数×４） |

■研修前

○研修会の概要等について、予め会議や紙面等で伝達する。

〇準備物、支援を検討する対象生徒及びグループ構成等を決定し、事前に通知する。

〇支援ヒント集を各自印刷したり、タブレットＰＣ等にダウンロードしたりして、当日閲覧できるようにしておく。

〇研修に当たって、対象生徒の実態や指導・支援に関する資料の内容を確認しておく。

■研修当日

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 流れ | 進め方 | 留意点等 |
| １ 研修の説明【全体】対象生徒について考える【個人】（５分） | 〇目的、流れなどを確認し、見通しを持つ。〇対象生徒との関わり方を振り返り、うまくいった支援（青）やうまくいかなかった支援（ピンク）を付箋に記入する。 | 〇付箋を用意する。〇青は「～する」という文章で書く。ピンクは解釈を入れずに、事実のみを記入する。〇付箋に記入することで、課題意識を高めるようにする。 |
| ２ 講義【全体】（２０分） | 〇講義を聞く。（テーマ例：特別な配慮を必要とする生徒への支援） | 〇講義内容から、生徒の実態の捉え方や支援方法をイメージする。※管理職等に講師を依頼する場合、「スライド②『講義用』」を活用することもできます。 |
| ３ 演習・協議【グループ】①講義を踏まえて個人で思考、付箋記入（Ｋ、Ｐについて）（５分）②付箋貼付、整理・分類（１５分)③個人の思考、付箋記入（Ｔについて）　（５分）④付箋貼付、整理・分類　　（１５分) | ○個人の思考を付箋に書き出す。〇ＫＰＴシートに次の支援ごとに分けて付箋を貼りながら説明する。１学期の生徒の実態を踏まえること。Ｋ･･･うまくいった支援Ｐ･･･うまくいかなかった支援Ｔ･･･学級担任や教科担任等で試したい支援策や解決策○生徒の実態の捉え方や支援に対する考えを共有する。 | 〇「流れ１」で記入した付箋も活用する。付箋の内容を簡潔に説明しながら、該当箇所に付箋を貼る。〇内容が似ている付箋は重ねたり分類したりして、タイトルをつける。〇Ｔについては具体的な支援策や解決策を説明する。〇対象生徒の実態に応じて支援ヒント集を活用する。〇Ｋ、Ｐに貼付の付箋と関連するＴに貼付の付箋を線で結ぶ。 |
| ４ 共有【全体】①ポスター発表　（５分）②まとめ　　　　（５分） | 〇グループの発表者が、ＫＰＴシートを使いながら協議内容について発表する。発表者以外の人は他グループの発表を聞きに行く。〇発表者以外の人は、自分のグループに戻り、他グループの発表内容を報告して共有する。 | 〇Ｔの支援策や解決策を中心に発表する。〇他グループの発表を踏まえ、支援の見直しや新たな支援を検討する。 |
| ５ 助言【全体】（１０分） | 〇講師からの助言を聞く。 | 〇助言内容から支援策の留意点を押さえ、具体をイメージする。 |
| ６ 省察・振り返り【個人】（５分） | 〇それぞれの立場で、実践する支援の優先順位を決定し、各グループの中で共有する。 | 〇学級担任、教科担任、部活動関係教員等で、予想される効果と着手しやすさから実践する支援策を決定する。　 |

■研修後

○助言や個人での省察・振り返りを踏まえ、学級担任、教科担任、部活動関係教員等のそれぞれ　の立場で支援を実践する。

○効果的なＴは、次のＫとなる。そこから、新しいＴを導く。これを繰り返すことで、毎回Ｔの評価が行われ、効果的にＰＤＣＡサイクルを回すことにつながる。